

淡路と言えば、野島の海人

『万葉集』には、淡路の歌をよくみかける。おそらく瀬戸内航路上であることが大きな理由であろうが、御食つ国と呼ばれていることも、理由の一つであろう。そのいづれにも関わっているのが、淡路の海人（野島海人と御原海人）と呼ばれた人たちである。

巻第六の九三三・九三四番歌に、淡路の海人を詠んだ山部宿禰赤人による長短歌が載せられている。そのうち短歌は次のようである。

朝風にあさかぜ 梶の音聞ゆかぢのねをきこゆ 御食つ国みけつくに
野島の海人の 船にしあるらしのしまのうみのふねにしあるらし

（巻六―九三四）

朝の波の静かな状態になると、船をこぐ音が聞こえてきて、それはきつと淡路国の野島の海人たちが漁をしている

るにちがいない、と予想している。

船をこぐ音だけで、御原ではなく野島の海人と特定しているのは、作者のいる場所が決め手ではなく、彼らの存在が関係していると思われる。

では、野島の海人の存在感とはいかなるものなのか。まず、長歌（九三三番歌）をみると、天皇に献上するために、海に潜って鮓珠を採る様子が詠まれている。これは御食つ国淡路の性格をよく表した歌と言える。

一方、『日本書紀』では、航海の水手のほか、去来穂別（履中天皇）と弟の住吉仲皇子との王位継承争いの重要な局面で、逃げる去来穂別の追手として登場しており、政権中枢部の周縁で政治的な活動も遂行している。

また、野島の海人は、調として塩を貢進していたことが、木簡から明らかとなり、かつその製塩場の一つと推測



貴船神社遺跡（野島海人の様子）

される遺跡も見つかっている。

このように、野島の海人が、漁撈にとどまらず、時代を通して、天皇や王族との間に築いたさまざまな奉仕関係をもつ、淡路を代表する豪族であるという点を見逃してはならない。

以上に留意すれば、赤人は、大阪湾岸地域で、天皇との関係が色濃く象徴として、「御食つ国 野島の海人」を想起したとする理解に辿り着く。野島の海人の存在感は、我々が想像するより遥かに大きかったのかもしれない。

（万葉文化館主任研究員・竹本晃）